

兵庫県現代詩協会 会報56号

2024年12月1日 発行…時里二郎

「ふれあい文化の祭典

詩のフェスタひょうご2024」



挨拶する時里会長

2024年10月6日(日)午後一時半～四時半

於ラッセホール5階「サンフラワー」(神戸市中央区)
百十六名の参加申し込みがあり、当日は九十一名の参加者で盛会のうち無事終えることが出来ました。今回は甲南大学・京都大学・大阪大学の学生などを含め若い参加者が多く参加してくれました。

丸田礼子さんの司会で始まり、時里二郎会長の挨拶の後、大きな拍手で、山崎佳代子さんが登場され、「今、詩に委ねられたもの」と題して講演をいただきました。

詩は、人々に希望を注がなくてはならない。そして出来ると話されました。

神田さよ副会長の閉会の挨拶の後、山崎佳代子さんの書籍を求める方々の長い列が出来ました。

皆さんのご協力に感謝いたします。
昨年の白陵高校の生徒、今年は大学生の参加など若い世代の参加を得ましたが、兵庫県現代詩協会といたしましては詩を読み、書く人を一層広げていきたいと思っています。

■講演報告

報告 野口幸雄

名刺代わりにと詩の朗読から始まりました。良く通るお声と、読まれる合間にピタリと聴衆に視線を当てられる、その力強い姿が大変印象的な方です。そこには、

生き方そのものが映し出されてると思いました。

山崎佳代子さんは一九七九年にユーゴスラビアに留学され、サラエボ大学、そしてベオグラードで家族とともに生活されてますが、留学当時は先でまさか戦争にまきこまれるとは、思ってもいなかったそうです。そして一九九一年、内戦の始まりが詩作の始まりのことですから、まさに詩を書く方へ運命的な導きがあったように思えます。



講演する山崎佳代子さん

須賀敦子や白石かずこという偉大な詩人との交流、そしてセルビアの詩人デサンカ・マクシモビッチのこと。彼女らがいてこそ今の詩人としての自分がいると懐かしそうに、時に笑いながら、時に哀感をこめて情熱的に話されました。デサンカの言葉「詩は、人々に希望を注がなくてはならない」は詩を書くうえでの拠りどころであるのだろうと感じます。

私たちは遠い国の戦争に対し、報道される視点でしか知ることとはできず、それは覗き見るだけのものではないかという後ろめたさを常に抱えています。それだけに今回の山崎さんの「テレビは(人や物が爆撃によって燃える匂いを伝えない)や「身内の死には嘆き悲しむのに、なぜたくさんの死には鈍感なのか」という言葉にはつい俯いてしまう。「中立や対話を叫ぶ人たちが攻撃される」世界においては、普通の人たちの地獄の苦しみ、悲しみは見事に無視され、捨て置かれてしまう。その中を恐怖に震えながら、人を世界を見てきた人だから言える言葉は重く強く響いてきました。そして彼女の心に今も張り付いたまま

まのヤセノバツ強制収容所の少女の囚人服。ナチズムの嵐が吹き荒れた時代、アウシュビツツよりも過激で残酷な所で子供絶滅収容所はセルビア人の乳幼児を対象としたものであったと初めて知り、多くの赤ん坊や幼児がどれほどの恐怖の中で命をうばわれていったことか、彼らの澄んだ目に短いこの世はどんなふうにか焼き付いたのだろうか。

命は命に

耳を澄まし

声もたてず

階段をのぼりつづける

これは山崎さんの「階段、ふたりの天使」という詩の一節です。体験と思いに裏打ちされた力で今からも階段を登り続けられるのでしょうか。希望を人々に届けるために。質疑応答で若い人の問いに答えておられます。「ストーリーがはつきりしていると、意味は一つ。行を削るとストーリーはあいまいになるが、意味は広がる、あるいは新しい意味が生まれる。削る練習をして下さい」と。これは問うた本人のみならず、会場にいた皆を深くうなづかせるものでした。

最後はセルビア語での詩の朗読でした。言葉はわからないなりに思いを込めた力強さは心を打たれました。

詩を書くとき、ついつい自分のことだけに固まってしまいがちの私ですが、講演を聞き終り胸に残ったのは、詩は他者に働きかけるもの、届けるものでなければならぬということでした。これは山崎さんから私たちに届けられた「新しい力」と思い、心に留めなければと強く感じています。

有意義で充実した時間をありがとうございました。

山崎佳代子様、並びにこの講演にお世話頂いた方々に感謝いたします。(参加者 91名) 報告 岩井八重美

■第26回読書会「山崎佳代子さんの詩心」

2024年8月3日 チューター 季村敏夫、参加者 30名

会の冒頭で季村氏は、イスラエルの空爆によって命を奪われたガザの詩人アルアライールの詩を引きながら、

ユーゴ紛争を経験した山崎佳代子を今取り上げることが、ウクライナ戦争・ガザでのジェノサイドを語ることにつながり、二人の言葉は、会場にいる私たち一人一人に、「どんなふう生きていくのか」、「詩とは何か」を問うているのではないかと問題提起をなされた。

この問いの背景には、山崎の来歴が関係している。山崎は、北海道大学露文科を卒業後、1979年に政府交換留学生としてユーゴスラビアに留学、翌80年に山崎洋氏（ゾルゲ事件に連座したブランコ・ヴケリッチ氏の息子）と結婚した。同年、カリスマ指導者チトー大統領が死去、ユーゴスラビア連邦を構成する6つの共和国と2つの自治州では民族間の対立が激化、91年には内戦が勃発する。山崎は、内戦状態のユーゴスラビアにおいて、ベオグラード文学部で博士号を取得し、3人の息子を育てつつ学者としてのキャリアを築いた。このように山崎は、国家（ユーゴスラビア社会主義連邦共和国）の解体という激動の日々を、現地で身をもって体験したのである。

それから季村氏は、四方を海に囲まれて異民族支配を経験したことのない日本と、侵略・虐殺が続き憎悪の積み重ねの中にあるバルカン半島とは、立場が決定的に違うことを再確認しつつ、新約聖書の引用や石原吉郎との対比から、山崎の人物となりや詩心について分析した。

山崎は詩や散文で「善き人」という表現を多用するが、季村氏は彼女こそ「善き人」であるとすると、ここでいう「善き人」とは、ルカ福音書10章「善きサマリヤ人の譬え」でイエスが説いた「善き人」を指す。誰もが無視した行き倒れの貧者に、唯一寄り添い介護したのは、最下層で虐げられた貧しいサマリヤ人だった。この譬えによって、イエスは「我を省みず一途に救済する究極の隣人愛」を説こうとした。

「善き人」とは、この教えのように「どうしてよいかわからないくらいに圧倒的な物量で事が襲ってきた非常時（戦争・災害・緊急事態など）」において「資本主義的な損得勘定なしに行動する人」「真に利他的な人」を指すのではないか。季村氏は、「善き人」を体現する人物として、

宮沢賢治や中村哲 医師を挙げ、山崎さんもそこに連なる一人であると理解する。

91年から10年間に及ぶユーゴスラビア内戦は悲惨を極め、家族や仲間を殺され、住む場所も奪われ、ベオグラードには100万人もの難民が流入した。欧米から悪玉とされたセルビアは、連日、NATOからの空爆も受

けた。(山崎夫妻はCNNなどの欧米メディアの報道はでっち上げだと抗議している)

このような極限状況(非常時)にもかかわらず、山崎は、日本の外務省からの退去勧告を拒否し、ベオグラードにとどまり続けた。そして、様々な民族が住む共同住宅に暮らしながら、難民と共に食事をし、語り合い、詩を書き、彼等からの聞き書きを本にまとめられた。季村氏はそこに、石牟礼道子に通じる震えるばかりの詩的魂を感じるという。悲しみを人と人とのあわいにおき、苦しんでいる人に手をさしのべる山崎にとって、詩は「人と人とを結び合わせるもの」であり、その意味で石原吉郎とは対極にあるとも指摘された。

季村氏は、十年ほど前、自分に変に甘えた生き方をしていた時に、神戸大の研究会で山崎さんと出会った。以来、ベオグラードのお宅を訪ねるなどの交流を続けているが、彼女の言動や詩に接するたび、背筋が伸びて凛とするようだ。山崎さんと同世代の私にとっても、スケールの大きな生き方や勇気が眩しくてならなかった。

報告 長岡瑛美



読書会で講演する季村敏夫氏と司会の丸田礼子氏

第14回 ポエム&アートコレクション 2025

今年も神戸文学館にてポエム&アートコレクション展を開催いたします。ただし日程が文学館の都合上、例年の1月末開催が3月末開催になっています。お気をつけくださいますようお願いいたします。

◎2025年3月27日(木)～4月1日(火)

平日 午前10時～午後5時(土・日 午前9時～午後5時)。最終日4月1日(火)は午後3時まで。

*会場：神戸文学館 〒657-0838 神戸市灘区王子町3-1-2

Tel & Fax 078-882-2028 (阪急電車王子公園駅西へ徒歩7分 JR灘駅北へ徒歩10分 王子動物園西隣)

*主催：神戸文学館・兵庫県現代詩協会

後援：日本現代詩人会・半どんの会

1. 詩・アート作品展示 ★出展申込=会報同封のハガキにてご連絡ください(締切2025年1月15日(水))

会員による詩・アート作品(絵画・書・オブジェなど)の展示。

*搬入：3月25日(火)午後1時(午後3時までに作品展示作業完了のこと)

*搬出：4月1日(火)午後3時

なお、宅急便での搬入・搬出は不可。車での搬入・搬出の方は、2025年3月10日までに神戸文学館(078-882-2028)までお申し出ください。(2台分の駐車スペースあり)

*参加費 1作品500円(2作品まで可)搬入時に納入してください。

2. 講演会

演題：「 未定 」 講師 神尾和寿

日時：3月29日(土)午後2時～3時30分

*講演会に参加ご希望の方は、神戸文学館(078-882-2028)に事前に直接お申し込みください。

3. 「詩の現在展」

本年も会員の詩集、詩誌を展示します。(担当：福永祥子・福田知子)

第27回読書会予告

2024年12月7日(土)

会場 神戸市中央区文化センター

1111号室 午後1時～

「蜂飼 耳の詩について」

チューター たかとう匡子顧問

第3回兵庫県現代詩協会・関西詩人協会合同企画

日帰りバスツアー

国生みと神話と万葉の島

晩秋の淡路島一周文学史跡巡り

景山尚久氏 同行(武庫川女子大学日本語日本文学科教授)

日時・2024年12月14日(土)

集合・解散位置・JR三宮駅南東ラウンドワン前 集合時間 午前9時00分時間厳守

帰着予定時間 午後5時00分 参加費・一人6,000円

若干余裕あり

*ご家族・友人の
同伴可能です。

○再募集○

申し込みは先着45名で、10月31日締め切りでしたが、まだ少し余裕があります。兵庫県現代詩協会では12月7日まで先着順で申し込みに対応いたします。

兵庫県現代詩協会の文学紀行担当・大西隆志までご連絡ください。

時間的なこともあり、電話かメールで連絡をくだされば幸いです。

※大西隆志 携帯 090-3714-9387

E-mail furado.t@gmail.com.

日本現代詩人会ゼミナール 2025 in 神戸のお知らせ

★日時 2025年3月15日(土) 13時30分～(受付13時より)

★場所 ラッセホール 2F ブランシュローズ
神戸市中央区中山手通4-10-8

★講演 蜂飼 耳

★対談 蜂飼 耳・時里二郎

★自作詩朗読

ゼミナール参加費 会員無料/一般 1000円

ゼミナール終了後、懇親会を同会場で行います。

詳しくは同封のパンフレットをご覧ください。

問い合わせ先 神田さよ nrk54251@nifty.com

主催 日本現代詩人会・兵庫県現代詩協会・ゼミナール 2025 in 神戸実行委員会

■会員の詩集から

時里二郎

◎『湯気の向こうから』今村欣史(私家版)

短歌誌『六甲』に二〇〇六年五月号から七七回にわたって連載された随筆に加筆修正を加えたもの。今村さんの随筆は、すでに話題になった『完本・コーヒークップの耳』があつて、本欄にも取り上げた。その時にも書いたが、聞き書きの妙味に感心した。例えば、語りの文体——今村さんの口を通して常連客の話は再構成され、それをそれぞれの人間味溢れる個性に落とし込んでいくというスタイルの妙味。本書の特徴は、巻末にある一三〇人余りの人名索引によくあらわれている。宮崎修二郎さんが飛び抜けて多く、ついで足立巻一、富田碎花と続く。今村さんが強い影響を受けた文学者の興味深いエピソードや人物スケッチを通して、その人となりや彷彿と浮かび上がる。何より面白いのは、彼らのエピソードが、今村さんでないと出てこないものばかりであるということ。よく名の知られた人ばかりではない。本書には、今村さんの人柄に引かれて多くの市井のゆかりの人たちが登場する。あえて私家版になさったのは、そういう極端的な交流も多く記されているからだろう。宮崎修二郎、足立巻一、富田碎花、杉山平一といった知られた人たちの、表には出てこない人柄のディテールを味わう面白さと同時に、今村さんの人柄にひかれた市井に生きたアノニムな個人にも光をあてて、自らの生きた時代を伝えようとしている今村さんの思いを強く感じた。

◎『平野のまちの物語』玉川侑香(風来舎)

ひと息に読んでしまった。一編一編が珠玉の掌編として読める。

ここに描かれた平野は、もちろん神戸の下町の、実に人間味溢れる濃密な高度経済成長期の日常に生きた子どもたち、大人たちの街なのだが、それは、とりもなおさずこの国の高度経済成長期の市井の人々の姿そのものだったと言えるのではないか。評者は、ずっと田舎の農村地帯に少年時代を送った者だが、共感、共鳴するところが随所にあった。

絶妙なのは、「私」ではなく「ユウちゃん」を主語に選んだこと。この一呼吸おいた主語の距離感によって生み出されたナラティブな魅力。それにディテールの描写力の確かさによって、描かれることがらの客観性や普遍性が担保されていること。

高度経済成長期に子ども時代を生きた人たちが、しかも「平野」という、この国の経済成長のモデルのような、戦後のな定点を、これほど克明に、しかもリアルに活写したものをほかに探し出すのは困難ではないだろうか。ここに描かれたエピソードをもとにして、例えばオムニバススタイルの映画にできないものかと思う。ディテールの面白さ、エピソードの生き生きとした臨場感、どこをとっても読む者の心を揺さぶらないではおれない。

玉川さんには、本欄で取り上げた『戦争を食らう 軍属・深見三郎戦中記』という、父の戦争の手記に取材した「詩物語」がある。それが戦争の時代(戦中)の記録であるとすれば、今度の作品はそれに続く戦後の記録である。二部作として読むことができることも付け加えておきたい。

◎『扉が開くと』江口節(編集工房ノア)

第二回小野十三郎賞を受賞した『水差しの水』に続く第十一詩集。あとがきに「前詩集には、スタイルの違いから割愛した紙片」に「その後」に書いたものを加えて、本詩集を編んだ」とある。

前詩集は、ふだんは日常にひそんで隠れている、かけがえないものの喪失感やぬきさしならぬ人生の出来事を通して、生きることを静かに見つめようとする思いをテーマにしていた。この詩集にはその強いテーマ性は解かれていたが、しかし言葉(詩)というものの、生きるということを巡って書かれた詩集であることはかわらない。

「森」(略)時代はいつも森である/見通せぬ樹々の向こうに/問いが生まれ 選り取る「時」があり/決められるものは 少なく/森を出ても また別の森 無数の森/鳶 鳶 はびこる日々の/生きるとは何か/ (略) (「森へ答える」部分)

「略」／言葉の美と虚 裏と表／単なる言葉ごときか
／言葉が背負うものには／言葉を背負うものをさか
し／詩は何処へ行くのか／「略」(「あふれる星」部分)

というような構えの大きな作品のほかにも、

「軽いんだな、もともと／風吹けば／飛んでいく綿毛／
金もないのに／さっとヒンシユクを買ひ／かなし実や
なや実が／なかつたら／とづくに 友はいなかつた」(「実」
全編)

のようなどとても瀟洒な言葉遊びを織り込んだ軽やかな
ステップを踏んだ小品。

「向かってくるものにひるむな／脊を押すものに／
たよるな／そう／遠くへ飛んでいくのは／向かい風の
時／失速するのは／追い風の時」(「スキージャンプ」全編)
のような、ちよつと肩の力を抜いた杉山平一風の短い
作品もある。

江口節さんの、言葉の領域の広さと深さを味わうこと
のできる好詩集だ。

◎『柿色の家』工藤恵美子(編集工房ノア)

『テニアン島』『光る濡 テニアン島II』に続く第三詩
集。周知のように、工藤恵美子さんの詩のテーマは、この
二詩集にあるように、故郷であるマリアナ諸島テニアン
島での幼少期の生活であり、戦争の記憶であり、家族の記
録であった。この二詩集はただ工藤さんの人生の時間の
みならず、「貴重な時代の証言・記録」(安水稔和)でもあ
る。

今回の詩集では、島から内地に引きあげた戦後の歲月
を振り返る。単に戦後といつても、宮崎から始まって、山
口・門司・小倉・大阪・名古屋と、転勤族の生活の日々、
ようやく終の棲家となる「柿の木のある家」での、家族と
ともに生きた日々、また、後半には二人で訪れた海外の旅
の幾編かも収められている。波乱の戦時下、戦後の苦難を
しのいでの大切な幸の時間が記されている。

テニアン島の思い出を書いた一編「合歓の花」の全編を。

「合歓の花は／祈りの花／今日はちぎり絵の日／色
紙を指でちぎって／画面に貼り重ねていく／第二次世
界大戦で玉砕した／テニアン島は／私のふるさと／大

戦の末期／人も木も絶えた／死の島に／米軍は空から／
銀合歓の種を播いた／死臭を消すために／島中に咲い
た／銀合歓の花」

◎『雷が鳴っている』朝倉裕子(編集工房ノア)

昨年上梓なされた『母の肩』に続く第三詩集。タイトル
にもあるように、前詩集は母の亡くなるまでの「尊い時間」
を描いて深い感動を覚えた出色の詩集だったが、本詩集
のあとがきに「レコードで言えばA/B面にあたる。どち
らが表面ということではなく、両A面になっていると嬉
しい。」とある。

まず、「この春」の全編を引用しよう。

「切ったその時にとんでいった／指先の爪より細い月
が／曇り空にぼんやり浮かんでいる／あと数日で職場を
去る／どこかほころびた上着を脱ぐような／安堵と不安
／／何度も寒さが戻るこの春に」

いきなり飛び出す意表をついた細い月の比喩が絶妙だ。
そのぼんやり浮かんでいる月が、退職を数日後に迎える
作者の「安堵と不安」の表象にもなっている。また「ほこ
ろびた上着を脱ぐような」という比喩も新鮮だ。こうやっ
て、詩を腑分けすることが野暮に思えるほど、作品のどこ
にも無駄な言葉がない。その一行一行の行間ににじみで
ている豊かな余白の味わい。

詩集冒頭の「朝」から始まる定年詩篇とでもよぶべき短
めの作品がやはり、朝倉さんの詩のスタイルと呼んでい
いものだろう。

しかし、次の章からは、詩の世界に変化と広がり加わ
り、詩に対する意欲的な姿勢を感じる。彼女の日常や家
族・肉親のこと、目にする動植物や食べものなどが題材に
なっているが、どの作品もよく組み立てや表現の効果を
工夫した丁寧な書きぶり。例えば引用は省くが、「発見」
という一編を読めば、それがよくわかるだろう。

◎『かぎくま』増田まさとみ(霧工房)

前句集『止まり木』(二〇二〇年)に続く第七句集。増田
さんの句を読むようになったのは、句集『ユキノチクモリ』
(〇九)の「言霊を抜かれて雪は降るのです」の句に巡り

あったからだだが、この新しい句集においても次々と魅か
れる句が出てくる。

あけがらす蛇口は涎を滴らす

さきの世の糸にからまる螢狩り

寒昂あまたの死魚を降らしけり

さりながら雲雀は宙へ行つたきり

春の沖乗り捨てられし乳母車

増田さんの句の魅力はなんといっても、その大胆な表
象力であり、それがいつも、ある根源的なものに触れてい
るといふ感覚である。日常が一気に、なにか根源的なもの
にぶつかったり、吸い込まれたりする。いま「根源的なもの
」と繰り返したが、それは言葉ではつきりと名指し
できないが、人の生死、人の存在に深く根ざしていること
は言うまでもないが、さらにそのような人(や聞き物)の
存在を飲み込みながら、人(や生きもの)を生かしてもい
るようなものをイメージする。

「鍋底のことさら昏しあまのがわ」鍋底の昏さが銀河を
も孕み、逆に、鍋底の昏さが広漠な銀河に膨らむ世界。

根源的なものは、死の周縁に現れやすい。今度の句集で
印象深かったのは父の句。

「羊水に泛かぶ父あり春のゆめ／遠吠えか霧笛か父
のうぶごえか／炎帝をこうもり傘の父が行く／冬晴
れや石ころとなる父の骨(こつ)／物質となりゆく父よ
石鱈玉／何処へも戻らぬひとよ冬火花」

■常任理事会報告

2024年度・第1回常任理事会

6月16日(日) 神戸市中央区文化センター

出席…11名 欠席…1名

*第28回総会について 参加者34名 委任状30通

懇親会参加者 19名

*入退会・入会3名 山根智行・ごうじまきこ・森野とうが

逝去 和比古 現在会員数 125名

*名簿 次回会報発送時まで発行。150部

*会計報告 4月、5月の会計報告

- * 会報 55号作成中。発送 7月1日
- * 読書会 8月3日13時〜神戸市中央区文化センター
「山崎佳代子の詩について」講師 季村敏夫会員
- * 日本現代詩人会ゼミナール2024.5 in神戸について
6月18日、事務局会議。次回常任理事会で報告
- * 『ひょうご現代詩集2024』について
今回は暫定的に複数の担当者で行う・初めての担当者でも作成できる道筋を立てる・担当者…安西佐有理、北野和博、神田さよ、丸田礼子・出版 濤標・参加費四千元・締切9月10日 発行部数…250部
- * 「詩のフェスタひょうご」チラシ案検討。県へ提出する書類の検討
- 第2回常任理事会**
8月31日(土) 神戸市中央区文化センター
出席…12名
- * 会計報告 6月、7月の会計報告
- * 読書会 8月3日「山崎佳代子さんの詩心」参加者30名
会報報告者 長岡瑛美 次回12月7日「蜂飼耳の詩について」チューター たかとう匡子顧問
- * 詩の講座・「宝塚詩の会」報告 8月11日(日)
宝塚市中央図書館 新川和江について 参加者9名
- * 「ひょうご詩の講座」12月〜3月まで4回行う。
会員にチューター募集案内を郵送。
- * 文学紀行 関西詩人協会とバスツアー12月14日(土)
淡路島めぐり 参加費六千円
- * 「ひょうご現代詩集2024」参加者数現在 24名。贈呈数検討中。表紙絵は中堂けいこ会員(濤標へ送付済)
挿画、彼未れい子会員
- * 会報56号 詩のフェスタ・ポエム&アート・文学紀行
ポエム&アート・今回2025年3月27日〜4月1日
- * ホームページ 文学紀行(バスツアー)の案内
- * その他 兵庫県からの「アートで躍動Z世代応援プロジェクト」に条件付き賛成の回答をした。
- * 日本現代詩人会ゼミナール in神戸 チラシ原稿検討

次回実行委員会2月9日

報告 神田さよ

■「ひょうご詩の講座」の案内

兵庫県現代詩協会の「ひょうご詩の講座」は昨年引き続き、2024年12月8日から開催いたします。中学生以上が対象で無料。主催する兵庫県現代詩協会(神戸市)は「思いのままを自由な形式でつづる詩の魅力を感じてほしい」と参加者を募っています。

この協会は第二次世界大戦後を起点に生まれた「現代詩」の愛好家が結成し、約120人が所属しています。今回も詩作を身近に感じていただくために、会員以外の皆様を対象に昨年に引き続き「ひょうご詩の講座」を企画しました。各講師による詩の解説のほか、事前に創作し持ち寄った詩の合評会を行います。近年は短歌や俳句が世代を超えて親しまれる一方で、現代詩は敷居が高くとっつきにくいイメージを持たれているのかもしれませんが、もっと気軽に自分の思いや表現したい気持ちを表現してみませんか。

昨年度の講師は・第一回が時里二郎・第二回は江口節・第三回が神尾和寿・第四回が北野和博・第五回が玉井洋子・第六回が神田さよでした。

本年度は期間が短くなりますが、12月8日・福田知子・1月5日・梅村光明・2月9日が荒川稔・3月9日が馬場秀司という形で予定されています。

既にさまざまな詩を読んでこられた方、既に詩を書いてこられた方、詩に興味を持たれておられる方など詩作の経験不問です。教室は神戸市中央区区役所併設の「中央区文化センター」会議室です。

<https://www.kobe-bunka.jp/facilities/chuo/chuo-content/>

講座内容…(1)詩とは何か(講師が選ぶ注目の詩人、講師の詩と作詞法など)

(2)質疑応答(講座内容のご質問のほか、現代詩に対する疑問など)

(3)受講者の作品合評(作品持参のこと)

改めて、本年度の講師のご紹介をさせていただきます。

12月8日 福田知子

1月5日 梅村光明

2月9日 荒川 稔

3月9日 馬場秀司

以上の兵庫県現代詩協会の会員

司会役は詩人で小説家の高木敏克となっております。

募集人員…10名程度

参加費用…無料

主催…兵庫県現代詩協会

報告 高木敏克

■他団体会報・詩書(2024・5月〜10月)

【会報】

福島県現代詩人会会報 第134号・135号

静岡県詩人会会報 151号・152号

新潟県現代詩人会会報 78号

兵庫県歌人クラブ会報 211号

岡山県詩人協会だより No. 41・42

日本詩人クラブ広報 107号

福島県詩人会 No. 189号

関西詩人協会会報 第114号

千葉県詩人クラブ No. 266・267

大分県詩人協会会報 No. 169

秋田県現代詩人協会 会報 第70号

高知詩の会通信 30号

茨城県詩人協会会報 No. 38

北海道詩人協会会報 No. 156

群馬県詩人クラブ会報 No. 328

埼玉県詩人会会報 第106号

中日詩人会会報 No. 211

宮城県詩の会会報 復刊54号

【詩書】

横浜ポエム24アンソロジー 終刊号(横浜詩誌交流会)

静岡県詩集2024 第28集
 広島県詩集2024 第34集
 三重県詩人集 VOL32 (三重県詩人クラブ)
 2024年間詩集(徳島現代詩協会)
 中四国詩集・2024

■会員の詩集・詩誌(2024・6月～10月)

時里二郎(『時里二郎詩集』5月刊・思潮社)
 玉川侑香『平野のまちの物語』5月刊・風来社
 増田まさみ『かざぐるま』7月刊・霧工房
 今村欣史『湯気の向こうから』7月刊・私家版
 江口節『扉が開くと』7月刊・編集工房ノア
 朝倉裕子『雷がなっている』8月刊・編集工房ノア
 工藤恵美子『柿色の家』10月刊・編集工房ノア
 ア・テンポ 55・56 (丸田礼子)
 現代詩神戸 286 (永井ますみ)
 別嬢 118・119 (高橋夏男)
 プラタナス VOL73 (玉川侑香)
 夜凍河 23 (滝悦子)
 EDGING 58・58-1 (寺田操)
 風の音 27 (野口幸雄)
 LingvoオクトM+ VOL22～24 (高谷和幸)

■会員の動静・イベント報告

○会員の動静(事務局把握分)

丸田礼子 半どんの会文化賞

○退会

起走マウス

○会員の活動

宝塚詩の会

現代詩講座「詩を読んでみよう 書いてみよう」

主催 宝塚詩の会・兵庫県現代詩協会・宝塚中央図書館

3か月に一度行うこの講座はこの11月17日で第6回目を迎える。宝塚詩の会は、宝塚市に在住する山下輝代

(代表)、芦田はるみ、神田さよの3人が、多くの方たちに、詩に関心をもってもらおうというささやかな想いで出発した。大きなイベントをして集客も考えたが、何度も話し合った結果、長いスパンで続ける詩を読む場、詩を書く場を作ろうということで、「現代詩講座」を設けることにした。

この時期、兵庫県現代詩協会は2023年度の事業として、詩を書く人の裾野を広げようという取り組みを考えていたところだった。それで、この宝塚詩の会も兵庫県現代詩協会の事業の一環とすることになった。

さて、これを実施する場所だが、心当たりの各所を見て回った。結局、足場もよく、来館する方に告知もできるということで、宝塚市中央図書館が最適と考えた。代表の山下は以前から図書館とのコンタクトがあったので、図書館長にお願いに行った。快くお引き受けくださり、案内のパンフレットを図書館だよりに同封して送付してくださった。惜しまず協力して下さった。現在では、宝塚市中央図書館もこの企画に参加するということで、主催者となつてくださり、大いに心強く、また有難く思っている。

いよいよ、第1回目は2023年8月20日に行うことに決定した。お膳立てはしたもの、詩は一般にはなじみが薄く、参加者が集まらないのではないかと不安はあった。しかし、開いてみると、当日は9名の参加者があった。その後も変わらない参加者数である。講座の内容は、始めの1時間ほどを一人の詩人について学んでいる。特定の詩人を定め、来歴などをふくめて作品鑑賞をする。これまでに、茨木のり子、杉山平一、吉野弘、新川和江、山之口貌などについて勉強した。その後、参加者の作品合評をする。これまで詩を書いていない方々が、いつも作品を創つてくるようになった。詩とは何？、現代詩って？と疑問を抱えながらも、お互いの作品に活発な意見や感想を出し合っている。真剣ではあるが、気心もわかり始め、楽しい時間となっている。

「この講座ができてほんとによかった。」

という嬉しい声もあり、講座を開設したことを心から喜んでいる。詩を書くことは孤独な作業であるが、詩を書

くことで、自身と向き合い、自分を知り、次の歩みを踏み出させてくれるのではないか。微力ではあるが、この講座が少しでも力になればと、3人いつも一生懸命だ。そして、私たちもこの講座を通して、学ばせてもらっていることに感謝している。

芦田はるみ・神田さよ・山下輝代

■新会員紹介

◇海埜 今日子(うみの・きょうこ)

プロフィール 日本詩人会、「Lingvo オクトM+」、「hotel 第2章」、詩集『季碑』、『かわほりさん』他。



投稿通信 拾 彼は誰を彼時に

音のなるほうへ。かわたれ時のあかい空が、どこかまがまがしいのは、なぜなのか。いなくなった、夜のまにま、ひがしの奥底に、消印のないハガキが投函される。そう、ふるい日付が、ささやいていた。さらさら、気配のするほうなら、たまさか、うけとることが。こたえのような、文面が暮れる。ようやく、あかるくなったというのにな。そんな目覚めでありましたよ。

声のとけるほうへ。まだいない朝のてまえで、なにかが息を吐いていた。はねつけるよう、はじのどこかが、すこし、いつも、暗いのです。なら、根っこのほう、手のなるほうへ、しめった感触をきくがいい。ふさいだ眼に、くちるような、だれですか。かれ葉がそっと、なでていた。ねどこに近しい、薄墨色の、つゆもおりる、からね。いいこに、してたら、またあした。

根っこの、のび、いや、はぐくまれるほうで。土と夜は、こんなにも。わくら葉たち、葉を書いて、ねえ、み

てよ。どこか、ぞっとするのは、なぜなのか。音のない、いえ、きかないほうへ。たそがれ時、と、こぼしてみる。やっぱり、さかしま。ちっとも、返信がきませんでした。だから、やさしい、のかもしれない。

埋み火のよう、どこか、さめて、あつくつて。空がやける、はぎまです。たれそかれ、かはたれそ、むかしはどちらでも。だから、ハガキ、寝床のふち、温床のきわで、すつかり、よめなくなり、けれども、さしだすのでした。墨をどんどんぬらし、にしほうへ。神事のような、声のほどける。だれに、かれから。ひがしでは、そんな、泥の眠りもありましたよ。

音のしなくなったほうへ。にじんだ、あかい、だれをかれへと、うやむやな、根のなるほうへ、おいで。闇のはじで、きつと、わくら葉、ぞっとするほど、したしげだから、またハガキ、したためるよ。こぞをかぎり、と、薄墨でしたか、すいこんで、あかあかと、さいたような、おわり、はぎだし、はじまって。埋み火ぼとり、たそがれて、さらさら、かわくよ、かれはだれ。

◇北西 功（ペンネーム 細見瀏一）
プロフィール 「雲と麦」(故工藤一麦主宰)「麦の穂」(編集者 故杉本省邦)の同人でしたが、二つの詩誌とも現在廃刊になっています。



漂流

一枚の絵がある

遭難した漁船にいる

4人の船乗りをえがいた

〈南風〉だ

まんなかに立つ隆々とした男は

荒れた海のなかで
遠くのかなかをみつめている
おそれもなく

すわっている男達は
沈黙の深さをあらわす
生きた彫像のようだ

ぼくは
この神話てきな描写にずっと惹かれていたが
でも、いまこの絵から

くらい想像をしてしまうことがある
こんなふう

☆
しずかな海に
いつそうの船が漂っている
あおい襤褸切れが船底にある
あの船乗りが
灼熱の光にかざしていたものだ

点在する
みじかい影が
つよい光線に灼かれている
誰もいない船は
はてしない紺壁のなかを
南風に揺れかたむきながら
漂っている

☆ *南風は和田三造の作である

■新入会員をご紹介ください

兵庫県現代詩協会は詩に関する幅広い行動を行っており
読書会や文学紀行などお互いの交流を図っています。
詩を愛する集いの場として新たなつながりに参加希望の方を求めています。

・入会申込先 野口幸雄 Tel 090-7963-0090

■ホームページにあなたのエッセイを

協会のホームページ「会員寄稿エッセイ」
コーナーでは、会員のエッセイを掲載しています。詩人との出会い、同人誌の思い出、研究している詩人の事、日常ふと心をよぎった事等々。積極的な寄稿をお待ちしています。



- ・会員ならどなたでも投稿できます。協会から直接寄稿をお願いすることもあります。
- ・エッセイまたは評論をお願いします。
- ・連載も可能です。投稿数が多い場合はあなた専用のページを用意します。
- ・読みやすい縦書き三段組み、縦スクロールで掲載します。

・既発表・未発表を問いません。ただし原稿は電子データでお願いします。(手書きの場合はご相談ください)
ホームページ担当理事・北野(sorahitajo@yahoo.co.jp)まで、メール頂ければ、様式をお送りします。

■会計より

順調に納入されています。なお、振込みの際は本名とペンネームの両方をお書きください。会費は四千円です。

振替口座 00920-9-111243

口座名 兵庫県現代詩協会 (担当 玉川侑香)

■事務局より

会員発行の著書・詩誌などの出版物は事務局まで送ってください。「詩の現在展」として展示します。
詩に関するイベント情報や会員の動静もお知らせ下さい。

◎兵庫県現代詩協会事務局 野口幸雄方

住所 〒657-0846 神戸市灘区岩屋北町

4-4-5-902 Tel 090-7963-0090

◎会報編集 《高谷和幸》 Tel 079-447-3652

◎印刷 《遊文舎》 〒532-0012 大阪市淀川区

木川東 4-17-31 Tel 06-6304-9325